

広瀬旭莊の「夜過^二三州橋^一書^二矚目^一」詩

——成立事情とその推敲の態度をめぐって——

月 野 文 子

一

広瀬旭莊（一八〇七～一八六三）は、豊後国日田の儒者
広瀬淡窓の末弟である。本名は「謙吉」であるが、中国風
に一字で「謙」と名乗った。「旭莊」と号し、また「梅墩^{（注1）}」
とも号した。兄の広瀬淡窓は西海の詩聖と称された人物で
あるが、その淡窓の許で学んだ旭莊も詩人としての評価は
高く、清の俞樾は『東瀛詩選』において旭莊を「東国の詩
人の冠」と評し、百数十人にも及ぶ近世漢詩人中最多の一
七五首を同書に収載した。

兄淡窓の養子となった旭莊は、筑前の亀井昭陽、備後の
菅茶山らに学んだ後、二十五才の時に家塾咸宜園を継いだ。

しかし、日田の代官塩谷氏による咸宜園の教育に対する干
渉と弾圧（官府の難）を契機として、故郷を離れることを
決意し、三十才で大阪に出て塾を開いた。さらに、天保十
四年（一八四三）、三十七才の夏、大阪を去って江戸に移
り、三年余りの期間を江戸で過ごすのである。

本稿では、旭莊が江戸在住中に作った「夜過^二三州橋^一書^二
矚目^一」と題する詩に焦点をあてて、この多作を以て聞こ
えた漢詩人の推敲の姿勢を逐ってみる。旭莊が自己の作品
の字句を度々改めたことは、夙に知られるところであるが、
その経緯を作品に即して具体的に考察することを試みよう
と思う。

この詩は、旭莊の詩集『梅墩詩鈔』の第三編の卷三の末

尾近くに収められているものである。『梅墩詩鈔』（以下『詩鈔』と略称）は、旭莊四十二才の時に初編、二編、三編（各々三巻から成る九巻）が一挙に刊行された。^{（注2）}『詩鈔』は、ほぼ制作年次に従って作品を配列しており、この最後尾にあたる三編の巻三には、天保十四年夏に大阪を去って江戸へ向かう途次から、弘化二年（一八四五）の年末に至るまでの二年半の作品をおさめている。当該詩は、旭莊の日記である『日間瑣事備忘録』の記事から、弘化二年の十二月十四日の作であることが確かめられる。

まず、作品を概観しておこう。なお、引用の本文及び返り点は『詩鈔』の刊本に拠り、それに従って私に訓み下した。

夜過二州橋書曝目

霜滿兼葭宿鴈驚　　霜兼葭に満ち宿鴈驚く
寒雲破處月華明　　寒雲破るる處月華明らかなり
依稀難認去舟影　　依稀として認め難し去舟の影
唯有金波入櫓聲　　唯金波の櫓聲を入るる有り

冬の夜更け、枯れた蘆荻の上に真っ白に霜が降り、その陰に眠る雁の群れが何物かにおどろいて目を覚ましたらしい。寒々とした雲の間から月の光が水面に射している。どうやら遠くに、去り行く舟があるようだ

が、闇の中、少し射し込んだ月の光だけでは、ぼんやりとしていて、その舟の存在を確認することが出来ない。ただ、月光を映して金色にひかる波のあたりに、櫓を漕ぐ音が吸い込まれていくばかりだ。

詩題によれば、冬夜、二州橋を通り過ぎた時に目にした風景を即興的に詩に書き留めたものである。難解な表現は少しもなく、凜とした空氣の冷たさと夜更けの静寂、荒涼とした冬枯れの水辺の風景、果てしなく広がる水面が眼に浮かぶような作品である。題画詩かと思われる程に、詠ずるところの景色が印象的にまとめられているのみならず、その風景の中から雁の動く気配や櫓の音までが伝わってくる。初句の表現ひとつをとってみても、余計なものは削ぎ落とされて、かつての旭莊の句

寒蘆雁起斜斜外（初編卷二「月」）

忽聞驚雁起蘆中（同「漁火」）

霜意森森野雁寒（初編卷三「冬夜聽雁」）

霜壓兼葭秋意闌（二編卷三「送井岡玄策夜歸」）

などと比較すると、意味の重複からくる煩わしさがなく、若いときから繰り返してきた表現が時間を経て熟成したかの観がある。

詩題にある「二州橋」は両国橋を中国風に言い換えたものかと思われるが、作者の眼は、橋桁の高い両国橋の上を

通過しながら水辺を見下ろしているのではない。視線がもっと低い所にあることは、詩の語句から自然に伝わってくるのであるが、実は作者はこの時舟に乗っていて、水面と同じ高さから水辺の冬景色を眺めているのである。詠作時の、作者の視線の位置までが読み取れるような優れた作品といえよう。近景と遠景、視覚と聴覚、明と闇、動と静が材料過多にならず、第三句までにすっきりと収まる。視線はさらに、結句で「去り行く舟のあたり」の一点に集約されるのである。

二

ところで、当時の両国橋の周辺は、この詩に詠まれたような寂しい風景ではない。橋の東西は盛り場で、茶店、芝居、浄瑠璃、新内、咄講釈、軽業、楊弓、なんでも揃っていたという。『江戸名所図会』や『江戸名所花暦』、『絵本江戸土産』などの挿し絵、あるいは浮世絵が描くところの両国橋周辺の風景は、猪牙舟や屋根船が行き交い、橋のたもとには護岸工事の石積みがなされ、水辺近くまで町屋や倉庫が立ち並んでいる。旭荘が詩に詠んだような荒涼たる風景ではありえない。二州橋が両国橋をいうのではないとしても、二州橋（二つの国にまたがる橋）という名称は、古

代の国境であった隅田川に架かる橋を指すとしか考えられないが、大橋と永代橋の周辺も事情は同じである。この点をどのように解釈すればよいのであろうか。

この時、旭荘が舟に乗っていたことは、『日間瑣事備忘録』（以下『瑣事録』と略称）によって確認できる。弘化二年十二月十四日の条に、割り書きのかたちでこの詩が書き込まれているのである。この前後の記述から、当該詩の成立事情を探ってみようと思う。それにかかわる部分を抜き出しておこう。句読点は『瑣事録』に拠ったが、返り点は私に施した。

余遂訪^二福彌^一、至^レ門、平次兵衛、敬藏、瀧右衛門、昇兵衛、亦方出^レ舟、福彌門臨^レ水、相視讓^レ入焉、余曰、四君奉^レ命矣、我則私覲也、請^レ後、比^二四子就^レ坐、余入^レ門、主人引^下同^二四子^一坐^上、供^レ酒、酉牌辭、四子要^二余入^レ舟、下^二釜屋濠^一、得^二一絶^一、霜滿兼葭宿鴈驚、寒雲破處月華明、依稀難認去舟影、但有金波入櫓聲、至^二元柳橋^一出

余（旭荘）が出掛けたついでに、福彌^{（注3）}（福島屋彌兵衛）富裕な商人で府内藩にも出入りしていた）を訪問した。ちょうどその家の門前に至った時に、平次兵衛、敬藏、瀧右衛門、昇兵衛の四人（府内侯の家臣で、旭荘と親交があった）も福島屋を訪ねるべく舟から降り

たところだった。福島屋彌兵衛宅の門は水（堀川）に臨んだ所にあるからである。入り口のところで互いに先を譲り合ったが、余は「皆さんは藩の御用、こちらは私的な面会ですから、後にさせて下さい」と言っ、平次兵衛ら四人が座に就いた頃を見計らって門をくぐった。福島屋の主人は、先の四人と同じ席に案内して、酒をすすめた。酉の牌（酉の刻Ⅱ午後六時ごろ）に福島屋を辞した。平次兵衛ら四人は、余と共に舟に乗ることを求め、釜屋濠（釜屋堀）から舟で下った。その時に、以下のような絶句が一首できた。（詩省略）：元柳橋に至ったのでそこで舟を降りた。

釜屋濠から元柳橋に至る間の舟中で当該詩は詠まれたのである。すれば、この時の経路を考えてみる必要があるだろう。彼等が舟で下った釜屋濠とは横十間川の俗称である。この川沿いに有名な鍋釜の製造業者の釜屋六右衛門と釜屋七右衛門の鋳造場があり、専ら彼らがこの川筋の世話をしたので釜屋堀と称するようになったという。左ページの地図^(注4)の下方である。なお、紙幅の都合上、地図は上が西、下が東になっている。地図の黒い部分が舟で通行可能な堀（運河）や川である。

この頃、旭荘の住居は浜町に続く久松丁にあった。地図の上方右である。そこは薬研堀と浜町川の間で、旭荘は平

常、薬研堀の入口にあたる元柳橋で舟の乗り降りをするところが多かったようである。一方、同行の平次兵衛らは筋違門内（現在の内神田あたり）の府内侯（松平左衛門尉）の藩邸内に居住していた。こちらは隅田川を浜り両国橋の先で神田川へと漕ぎ入れて、筋違門外で舟を降りるのが都合がよい。^(注5)釜屋堀あたりから隅田川へ向うには、堅川を経るか、あるいは小名木川を経るのが普通である。運河として掘られた堅川と小名木川は、平行して東西に流れて、中川（地図の下端）と隅田川を結んでいる。福島屋の正確な位置は不明であるが、『瑣事録』中の、福島屋訪問の記事を照合すると、上大島町か御材木藏のあたりの堀に臨む所であったと推定される。元柳橋は両国橋の手前であるから、ここから通常の経路で帰宅したのだとすると、二州橋と叫ぶべき大きな橋を通過することはない。

ともあれ、「釜屋濠より下る」とあるから、いったんは海の方へ進んだのである。すると、釜屋堀から小名木川へ入り、小名木川を西に進んで、隅田川へ入るのが最短の経路である。この場合は大橋の下を通過することになるので、当該詩の二州橋とは大橋のことである可能性もでてくるが、ここも渺茫たる風景とは程遠い。また、この経路だと元柳橋までの距離は一里足らずで、所用時間は猪牙船^(注6)なら四五十分、屋根船でも一時間程度であろう。



しかし、辺りに霜が満ち、雲間から月の光が差し込むという設定（月が既に高い位置まで昇っていなければならぬ）であるから、夜もかなり更けているはずである。福島屋を酉の刻に出発して、最短の経路で元柳橋へ向ったのでは詩に描かれるような時間帯になることはない。この点でも矛盾が生じてしまう。福島屋での用件を済ませ、酒でもてなされて微酔加減で舟に乗った五人は、日頃、学問や詩文を通じて親しく交わっているのである。旭荘が府内藩邸に寓居していた頃には、夜間に共に外出したり、文事について語りあかしたりするような間柄であった。それゆえ、興趣に任せてもう少し海に近い所まで舟を進めて、遠回りをしたことが想像されるのである。平次兵衛らが旭荘を舟へと誘ったのは、恐くそのためだったのだろう。

三

一行が遠回りをしたと考えることによって、時間帯の問題は解決できる。残された問題は、詩中の荒漠たる風景はどこか、ということである。当時の両国橋周辺のイメージと詩に描かれた風景とが、あまりにかけ離れていることは先に触れたとおりである。

無論、漢詩とて文学作品であるからには、虚構というこ

ともありうる。多少の嘘も誇張も、作品の内部に矛盾が生じなければかまわないのである。現実の風景を詠むのではなく、〈詩人の風景〉を詠むこともある。それは和歌の世界でも同じである。しかし、矚目の詩として舟中で、同行の四人に披露したのであるから、当夜、彼らが目にした風景を即興的に詠んだのでなければ意味がないだろう。いかに詩が優れていても、それが全くの虚構であったとしたら、遊戯的な作品や題詠ならともかく、同行の人々に対して旭荘自身が詩人としての面目を失うことにも為りかねない。

旭荘は当夜、両国橋の手前の元柳橋で舟を降りたこと、また、両国橋周辺は繁華な所であることから考えても、当該詩が描いたのは両国橋周辺の風景でないことは確かである。大橋であっても事情は同じである。しかし、矚目の詩でまったくの想像の景色ではありえないとすると、当夜、舟が両国橋付近に至る前に目にした風景を詠んだと考えるのが自然であろう。この点からも、舟が遠回りをしたと考えた方が都合がよい。すると、隅田川の近くで蘆荻が生えていそうなのは、河口の佃島あたりか、木場や洲崎弁財天のあたりであろう。

当時の切り絵図を見ると、釜屋堀より東の小名木川沿いは、大名の別業が幾つかあるのを除けば、新田ばかりである。その周辺には蘆や葦が茂っていたものと想像される。

また、釜屋堀以西でも屋敷地や町並みの間に新田とかかれた箇所がみえる。十間堀川をさらに南に下れば、俗に十万坪と呼ばれた埋立地がある。ここは享保八年から三年がかりで埋め立てた土地で、当時は一橋家の領地になっていた。広重の「深川洲崎十萬坪」（名所江戸百景の一つ）に描かれた荒涼たる風景である。その先は木場を経て洲崎弁天である。洲崎はまた、『江戸名所図会』に「冬月、千鳥にても名を得たり」とあるように、この付近は冬景色の名所となっていたのである。各地の名所図会が盛んに刊行されるなかで、隅田川の河口付近も身近な舟遊びの場所として意識されるようになっていった。富裕な武家や商人は季節を問わず、昼夜舟で出掛けたのである。佃島のあたりも月の名所となっていたらしい。旭荘らが酔にまかせて逍遙したとて不思議はない。

なお、ひとつ注意しておきたいことは、この詩の題は最初から附けられていたのではないという点である。『瑣事録』中にも、筆者架蔵の旭荘自筆の当該詩書幅にも詩題は書き込まれていない。『詩鈔』刊行のために作品を整理校訂する作業の中で附けられたのである。では、旭荘は何故「二州橋」という題をつけたのであろうか。繰り返し述べたように、この詩に詠まれた風景は両国橋周辺のものではない。また、詩に描かれたのは水辺の風景ではあるが、橋

とは直接関係のないものである。したがって、単に「両国」を漢風に「二州」と言い換えたというより、他に何か意図があつて二州橋を提示したと考えざるを得ないだろう。

古くは武蔵と上総の国境であつた隅田川の東側は一部の地域を除けば、新田が広がり蘆荻が生い茂る場所というイメージであつた。あえて題を二州橋とすることによって、かつて葛西領と呼ばれた隅田川東側の荒涼とした印象を強調しようとしたのではあるまいか。このことは、これ以前に江戸の名所記や錦絵によって、隅田川の東側や河口の景色がクローズアップされるようになったことも関係があるだろう。旭荘が当時の名所絵のようなものに刺激を受けたのだとすれば、詩に描かれた世界の視界が広く遠くまで行き及んでいることも理解できる。風景を描いた大判の錦絵が多く刷られたこの時期、旭荘が、風景画や名所記に描かれた場所を詩にいくつか詠んでいるのも興味深い事実である。錦絵が詩の表現に何らかの影響を及ぼしたと考えることも、あながち無理なことではないかもしれない。

或いは、「過二州橋」とすることによって隅田川に架かる大きな橋（長さ百間にも及ぶ）を通過して舟を河口の佃島の方へと漕ぎ出したという設定にしようとしたのかもしれない。隅田川流域を描く名所絵のほとんどが、橋を手前に描き遠く河口と海を望む構図をとっていることが示唆的

である。^(注7) その海上には月が描かれていることが少なくない。一般の人々が想起するところの隅田川の風景は、橋の辺りから海を望むものである。

四

旭莊は後に二度にわたって当該詩の文字を変えている。最初は『瑣事録』の清書の段階、^(注8) もしくはそれ以前と思われる。第三句が当初は「依依難認去舟影」（架蔵の書幅による）であったのを、「依依」を「依稀」に変えている。さらに、『詩鈔』の刊行準備のために詩稿を整理するにあたって、清書された『日間瑣事備忘録』の書込みでは結句が「但有金波入櫓聲」（架蔵の書幅も同じ）であったものを、「但」を「唯」に変えているのである。細部までも揺るがせにしない旭莊の態度を窺うことができるが、このことは旭莊の助字に対する意識を知る上で重要な意味をもっているのである。

実は、旭莊は「唯」の字を多用する癖をもっていたのである。若い頃は「唯」字一辺倒であったが、大阪に出た頃から、「但」や「只」の文字も使用するようになる。『詩鈔』中の作品から「ただ」と訓読する助字の使用例を抜き出してみると、その変化は顕著である。

		唯	只	但
初編	卷一	24	0	0
	卷二	8	0	0
	卷三	11	0	1
二編	卷一	19	1	0
	卷二	19	3	0
	卷三	10	3	0
三編	卷一	9	1	4
	卷二	14	1	2
	卷三	16	2	5

右の調査結果によれば、天保六年の筑前・長崎方面への旅、翌七年に泉州の境に移った頃の作品（二編巻二・巻三）から、「只」の使用が増え始める。さらに、「但」の使用は天保八年二月に半年ほど江戸に旅した頃の作品（三編巻一）から見え、江戸在住中の用例が最も多くなっている。

つまり、若い頃の旭莊は、「ただ」と訓読する助字に対する意識が希薄であったと言わざるをえないだろう。日田を出ることによって、多くの学者や詩人、あるいは新に接した書物などが、彼の意識を変えたのであろうか。とはいふものの、依然として使用数の多いのは「唯」である。

当該詩は「但」字の用法を意識して後の作であることに注意しておきたい。当初、この結句の「但」を旭莊はかなり意識して使用したと思われるのである。恐らく、旭莊は

力みを捨て去って「去り行く舟の影は見えないけれども、ただ櫓声によってそれらしいことを確認できる」という、冬の風景にふさわしい淡泊な表現をしようとしたのである。それを後日「唯」に改めたのである。とすれば、「唯」によって、「櫓声以外は何の音もしない」ことを強調する冬の夜更けの静寂を表現する方を良しとしたのである。確かに、後者の方が作品は引き締まる。

浅学の我々には、どちらでもよいように感じられるが、当時の詩語集などには「但」と「唯」の区別を厳密にしようとする姿勢が見てとれる。日本人の不得意とするところの虚字をどのように使いこなすかが、詩人の評価に大きく関わることは言うまでもない。ちなみに、近世後期には漢詩を嗜む人口が飛躍的に増え、詩語や助字に関する多くの書物が出版されている。その幾つかを確認してみよう。

『詩家用字格』^(注9)

【惟唯】古今相通シタムト訓ス独也専ナル辞ト註シ
一スチナルノ言ニシテ旁ヘカムラヌナリ：【唯】：
(用例省略)：ヒトリノ義ニシテ旁ヘカムラヌソ、惟
唯相通シ妨ナシ然レトモ惟ハ心ニ从フ故ニ思フノ義
アリ

【但】タムト訓シ正字通ニ語ノ辞猶言特第也ト註シ
時ハトリワケト言フカ如クナレハ言分ツノ言ニシテ

タムシノ訓ニヨク当レリ：(用例省略)：但ハ上ノ義
ヲ其マムニシ但シ下ノ義ハ如此ト云フ中間ニ下スト
心得テヨシ第也ト註スレハトリ又一筋ノ意ハ
無ソ

『詩語解』^(注10)

【唯】ハ専ナル辞訓独与【惟】同音相通

【但】ハ徒也任従也

『詩家推敲』^(注11)

【但】ハ徒也任従也又約載之辞【第】ハ但也ト訓ス
：唯ハ事物ノ上ヒロクイフ但ハ事の上ノミニ云テ物
ノ上ニハイハズ：但看古来歌舞地、惟有黄昏鳥雀飛、
二字ノ義アハセ見ベシ

『詩学弁髦』^(注12)

【唯有】唯ハ惟ノ字ト音義トモニ同ジ専辞也ト注ス
惟独ノ義ナリ

【但須】但ハ单辞也ト註ス单トハ二ツヲカネヌ義ナ
リカタカタヲ引ワケテ云詞也

【但有】但空也ト注シ徒字ト同義ニ用ユ

「唯」と「但」は意味的に重なる部分を持つが、右に掲げた書はいずれも両者の共通点を認めようとしていない。それらが説くところの助字解説が、ことの当否はともかく、当時の人々の共通の「格」として定着しつつあったのであ

る。しかし、若い頃の旭莊には、こういった意識はなく、全て「唯」の字で済ませている。初編から三編までの九巻の中で八十首余りの詩でこれを使用している。この中には、長篇ではあるが、一首で五箇所も使用するものがある。また、「唯」よりも「只」か「但」の方が良いと思われるものも少なからずある。

五

結句を「但」から「唯」に変えたのは、最終的な段階であったと思われる。それは、『詩鈔』において当該詩の次に配列されている詩の表現とかわるからである。当該詩の次に配列されているのは、亡妻の一周忌の作である。

臘月十日亡室小祥賦此

一自靈車向九原 一たび靈車九原向かひしより
都門風雪獨消魂 都門の風雪獨り魂を消す
猶餘當日牛衣在 猶ほ當日の牛衣餘りて在り
偏覺爾來添淚痕 偏へに覺ゆ爾來淚痕を添ふを

右の結句の一字めが、『瑣事録』の書込みでは「唯」であったものを、『詩鈔』では右のように「偏」に変えているのである。『瑣事録』では、二州橋詩は十二月十四日に記さ

れ、亡室小祥詩は十二月十日に記されており、紙数三丁ほどの隔たりがあるので、気付かなかったものらしい。二州橋詩の結句を「唯」に変えて、『瑣事録』の書込みのままに亡室小祥詩を抜き出して並べてみると、まことに具合の悪いことになってしまっているのである。

夜過二州橋書矚目

霜滿蒹葭宿鴈驚 寒雲破處月華明
依稀難認去舟影 唯有金波入櫓聲

臘月十日亡室小祥賦此

一自靈車向九原 都門風雪獨消魂
猶餘當日牛衣在 唯覺爾來添淚痕

つまり、二州橋詩で「但」の字を「唯」に変えると、二首続けて結句で「唯云々」の表現を使ってしまうことになる。一首の眼目であるべき結句の強調の「唯」が二首連続しては、強調がかえって相殺されてしまう。同じパターンを繰り返すことは避けねばならないことであつたろう。旭莊は、『詩鈔』を編纂するにあたって、かなりの数にのぼる作品を切り捨てたというが、両詩はどちらも自信作であった。しかし、二州橋の詩の結句はどうしても、「唯」に変えねばならないと考え、後者を「偏」としたのであろう。

旭莊が「結末においてさらに趣向を加えて詩情を一段と劇的に昂揚させる方法」に長けていたとの徳田武氏の指摘はすでにあるが、旭莊は自己の作品を構成的で変化に富むものにするために苦吟していたことがここでも看取できる。

旭莊は古体の長篇詩が得意であったとされるが、当時、流行したのは七言の絶句と律詩であり、書画会や詩会において求められたのもそれである。作詩階層の拡大によって解りやすい詩型が必要されたことによるのであろうが、その風潮ゆえに旭莊も絶句や律詩で評価されることを余儀なくされたのである。その結果、旭莊は自在に詠み継ぐことのできる長篇の古詩よりも、かえって、絶句に意を用いなければならなかったのかもしれない。絶句ばかりをもちやす当時の傾向を「世は好みて絶句に趨る」と詩（除夜祭詩）中で嘆いている。

六

多作であるにもかかわらず、人一倍、一字一句に拘り、それを疎かにしない姿勢は、兄淡窓の影響なのである。淡窓は『淡窓詩話』において、作詩にあたっては推敲鍛練がいちばん重要であることを繰り返して述べている。^(注14)

拙ヲ去テ、巧ニ就カント思ハ、意ヲ用ルコトヲ精シ

広瀬旭莊の「夜過三州橋」書「矚目」詩

クスベシ、其拙ナルハ、意を用ルコト粗ナレバナリ、故ニ巧拙因用意之精粗ト云ヘリ、意ノ用ニ方ヲ精シクスルコト、推敲・鍛練ニ在リ、賈島ガ推敲ノ二字ヲ思ヒ、京尹ノ行列ニ触ルコトヲ覚エザリシヨリシテ、推敲ノ名モ始マリ、独行潭底影、数息樹辺身、ト云フ一聯ヲ三年考ヘタリト云フコトモアリ、李太白ハ一斗百篇ト云ハレタル人ナレドモ、只見涙痕湿ト云フ句ハ始ハ涕淚落ニテアリシヲ、半年ホド考ヘテ、涙痕湿ト改メシトゾ、古ノ名家意ヲ用ルノ精シキコト、此ノ如シ、其巧ナル所以ナリ、今ノ人只速ニ成リ、多ク作ルヲ以テ貴シトス、意ヲ用ルコトノ粗ナル、其詩ノ拙キ所以ナリ（『淡窓詩話』上巻）

酒を飲めばすぐに詩ができるといわれる名家李白でさえ、精密な思考を巡らし、推敲に力を入れたことを説いている。そして、今どきの人たちが、詩を作ることの早さやその数の多さをほころぶことを戒めているのである。『夜雨寮筆記』巻四においても、李白の「只見涕淚落」を例に挙げ、推敲鍛練の必要性を説いている。淡窓は、詩人が上達するため鍛練の方法としてのみ推敲を考えていたのではなく、名家と呼ばれる詩人のあるべき態度としていたようである。この詩人としての基本姿勢は、少年時から兄の許で学んだ旭莊にも受け継がれたのである。

それは、旭莊の詩文の其処此処に表れている。たとえば、

独行潭底句三年、苦思誰同賈浪仙（初編卷二「人影」）
の句も、淡窓が述べてきたところの賈島の故事を詠んだものである。また、当該詩と同じ十二月に作られた「除夜祭詩」と題する詩の冒頭でも、

我年十四初学詩 爾来二十六年役神思

寝而不眠食忘味 未至強仕鬢成絲

と平生の推敲の苦心をうたっている。塩田松園は旭莊が即興で優れた詩を詠む力量を持つにも拘らず、日頃の推敲に苦心していたことを述べている。^(注15)

多作をもって世に知られる詩人の中には、過去の作品の善し悪しには拘らない者もいるが、淡窓も旭莊も、一字一句に意を注ぎ、過去の作品の字句を改めることを憚らなかった。温厚篤実と才気煥発、性格が対蹠的といわれる二人であるが、この点においては同じであった。淡窓の作品中で最も広く知られている「桂林莊雜詠示諸生四首」は、文化年間の桂林莊時代の作であるが、『遠思樓詩鈔』の天保の刊本では、字句が改められていることが指摘されている。^(注16)

とくに、旭莊の場合は詩の書幅および草稿が多く残されており、『瑣事録』にも詩が書き込まれていることから、比較的容易に推敲の跡を辿ることができるのである。旭莊は書幅に為書した贈答詩ですら改めてしまっている。^(注18) それ

は、今日残されている旭莊筆の書幅の贈答詩と、『詩鈔』に載るその作品との字句が異なっていることによって明らかである。贈答詩は、通常感覚でいえば、詩を相手に贈ったその時点を経て、作品そのものが自己の所有から、相手の所有へと帰す。然るに、旭莊は人に贈った詩ですら、後日、平気で字句を改めてしまうのである。むろん、字句を改めて別人への贈答に再利用するわけではなく、贈った相手の名前も日付もそのままにして、字句を大幅に改めて『詩鈔』に収録するのである。したがって、それ以外の詩においては、なおさら、その推敲は納得のいくまで繰り返し行なわれる。『瑣事録』に書き込まれている詩のうち、二十二首が『詩鈔』に収録されるが、全く文字の移動がないものは六首のみである。他の十六首は何らかのかたちで推敲の手が加わっている。記憶力が抜群で他人の作った詩文も、二度読めば暗記してしまったという旭莊は、常に自己の作を念頭に置き推敲を繰り返していたのである。天授の詩才で縦横自在に詩を作ると愈樾に評された旭莊も、兄の戒めに従い努力を惜しむことはなかったのである。

また、旭莊は、詩集を刊行するにあたって、

詩ヲ作ラバ、一首ニテモ棄ツベカラズ、必ズ記録スベシ、千首ニモ至ラバ其内ニ就キ佳作ノ三四百首ヲ選ンデ、一部の詩集ヲ編ムベシ、其後又此ノ如クニシテ二

編、三編、四編ト、為スベキナリ、此ノ如クニシテ、
初年、中年、晩年ノ詩ヲ前後相照シ、以テ己ガ及バザ
ル処ヲ觀、務メテ一步ヲ進ムルノ工夫ヲ為スベシ。

〔『淡窓詩話』下巻〕

という教えに従った。作品をテーマ別あるいは詩型による分類をせず、年令ごとに作品をわけて、初編・二編・三編として刊行したのである。なお、旭莊は常に自己の作品を推敲することを怠らなかつたとはいへ、一定の期間を経たものはそれ以上の改変をせずに、その時代の自己のありようとして認めていたようである。これも淡窓の右の教えに従ったものである。このことは今日我々が、旭莊の詩境の変化や語句に対する意識の変遷をたどるのに有効である。

さて、『詩鈔』が実際に刊行されたのは嘉永元年であるが、初編巻一の坪井教の識語には「弘化丙午秋七月」とある。つまり、弘化三年の秋には、校訂の作業が出来上がっていたことになる。出版元の須原屋茂兵衛の名も、この頃の『瑣事録』中にしばしば見え、弘化二年二月には大阪の河内屋茂兵衛も江戸へ来て旭莊と会っている。^(注20)つまり、当該詩が詠まれた弘化二年の年末は、過去の作品の整理と校訂作業の最終段階であつたことになる。「二州橋」詩と「亡室小祥」詩は、刊行される全九巻の詩集の最後に並ぶ作品ゆえに、旭莊の思い入れも一入だったのである。

注

(注1) 旭莊の隨筆『九桂草堂隨筆』(巻之九)に、「旭莊」

の号は二十一才頃から使用し、「梅墩」の号は三十才前後から使用したとある。しかし、広く「旭莊」の名を以て知られていたらしく、彼の詩集である『梅(模)墩詩鈔』にも「旭莊広瀬先生著」とあり、また、今日伝わっている旭莊自筆の書幅も、多くが、「旭莊」の署名の下に白文の「広瀬謙印」と朱文の「模墩」の印を押している。

(注2) さらに、六年後の安政三年、四編の三巻が刊行された。なお、五編の三巻も予定されていたらしく、四編巻三の大尾に「五編三冊 嗣出」の公告が載るが、実際には出版されなかつたらしい。

(注3) 福島屋彌兵衛は、旭莊の兄南陔(広瀬久兵衛)と商売のことで係わりがあつたらしい。『瑣事録』の天保十四年九月十日の条に「(福島屋)主人年可五十五六快男子也、家富為府内侯外臣以給国用、与兄善語」とあり、印旛沼方面へ出掛ける南陔らのために船の準備をし、使用人の次郎吉を供に付けてくれた事などが詳しく記されている。旭莊は兄および府内藩の人々を通じて福島屋と親しくなつたものとみえて、後、浜町(久松丁)に屋敷を買う際にも、何度か相談したことが『瑣事録』に見える。

(注4) 地図は人文社の複製「天保改正御江戸大繪圖」(『江戸大繪圖集成』)をもとにしている。但し、この絵図

の縮尺は正しくない。

(注5) 旭荘は江戸に出た当初は府内藩邸に寓居していたが、

この頃の『瑣事録』に、「使米蔵買筋違門外尾張屋入」「筋違門外小松屋売舟者」「夜過半廻舟：筋違門外出帰邸」などの記事があり、府内藩邸からは筋違門外から舟に乗り降りするのが便利であったようである。

(注6) 『江戸の春秋』（鳶魚江戸文庫）によれば、猪牙船の速度は、人が急ぎ足で歩く程度という。屋根船の場合は、人が歩くよりも遅いらしい。

(注7) 歌川豊広の江戸八景の「佃島帰帆」（享和・文化年間）、広重の東都名所の「両国の宵月」（天保二年）、葛飾北斎の富嶽三十六景の「両国橋夕陽見」（天保二年）など、この地域の風景画でとくに遠近法の工夫と発達がみられる。これらは皆、両国橋の辺りから河口の方を眺望するかたちで描かれる。

(注8) 天保十五年六月二十五日の条に、「諸子所写瑣事録成十二冊、校正之」とある。旭荘は『瑣事録』にも手を入れて清書したのである。

(注9) 『詩家用字格』西成秋甫（享保五年）

(注10) 『詩語解』大典禪師（宝暦十三年）

(注11) 『詩家推敲』大典禪師（寛政十年）

(注12) 『詩学弁髦』種村箕山（寛政十一年）

(注13) 徳田武『結末の昂揚——旭荘詩の二方法』（江戸詩人選集第九巻月報 平成三年十二月）

(注14) 「後世詩二巧ナランコトヲ欲セバ、多ク作り、且、推敲鍛練スルニ如クハナシ」（『淡窓詩話』上巻）、「古

人云、千鍊シテ字ヲ成シ、万鍊シテ句ヲ成スト」、「詩ヲ学ブ者、四ノ疾アリ、一二ハ速ニ成ルヲ求メテ、槌鍊苦思スルコト能ハズ」（同下巻）など、淡窓は繰り返し推敲の重要性を説いている。

(注15) 「除夜祭詩」詩の塩田松園の評「余嘗耳兄敏捷、隣居二年、未^レ見^レ即席賦詩、竊疑^レ之、間請刻^レ香一寸、余自呼^レ韻随^レ応、使^レ一人操^レ筆疾書、而不^レ能^レ及、立得^レ七律三首、燦然如^レ宿構、七步八叉、豈足^レ言乎、然其生平刻劃如^レ是、信乎良工多^レ苦心^レ也」
(注16) 工藤豊彦『広瀬淡窓・広瀬旭荘』（昭和五三年三月・明徳出版）

(注17) 岡村繁「広瀬旭荘の遺稿とその推敲過程」（斯文106号 平成十年三月）が参考になる。

(注18) 工藤氏前掲書所収の写真「雨中藤岡二子来訪」詩（五言律詩）の書幅は旭荘宅を訪れた人物に書いて贈ったものであるが、『詩鈔』に載せる際には九文字が改められている。

(注19) 『九桂草堂隨筆』にみえる旭荘の回想による。

(注20) 弘化二年二月二十五日の条に、「河茂大坂至来訪飯之」とある。河茂とは河内屋茂兵衛のことである。『詩鈔』の出版元は江戸日本橋の須原屋茂兵衛と大坂心齋橋の河内屋茂兵衛である。